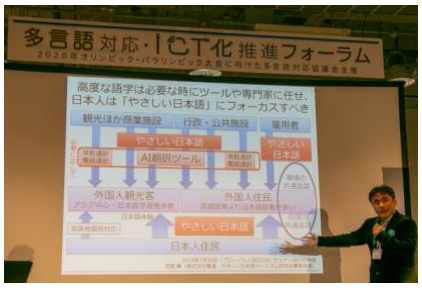
多言語対応・ICT化推進フォーラム
「やさしい日本語×多言語音声翻訳」

講師：小平市地域振興部文化スポーツ課 主任 萩元 直樹氏
やさしい日本語ツーリズム研究会 事務局長 吉開 章氏（株式会社電通）
国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT) 先進的音声翻訳研究開発センター 企画室 藤田 智子氏

「2020年オリンピック･パラリンピック大会に向けた多言語対応協議会」により、多言語対応の取組事例を広く共有・発信するための「多言語対応・ICT化推進フォーラム」が12月20日に開催されました。「やさしい日本語×多言語音声翻訳」セミナーでは、講師の萩元直樹氏、吉開章氏、藤田智子氏により、やさしい日本語の役割や多言語音声翻訳技術の開発計画、小平市において行われている外国人おもてなし事業についての講演が行われました。

「やさしい日本語×多言語音声翻訳」とは、リオ2016大会JAPAN HOUSEにおいて、萩元氏がNICTと共に行ったVoiceTraプロモーションの中で得た着想をベースに、2018年度より小平市の「東京2020大会に向けた外国人おもてなし事業」として進められているものです。



やさしい日本語の啓発活動を行う吉開氏は、「やさしい日本語」とは日本語初学者のために、やさしい語彙や文法で話す日本語であると説明します。やさしい日本語では、はっきり言う、さいごまで言う、みじかく言うの「は・さ・み」の法則が重要であると言い、中でも大事になるのはみじかく話すことであり、お召し上がりになりますか？」のような敬語ではなく、「食べますか？」と話すことがやさしい日本語の考え方であると説明しました。

やさしい日本語とは、阪神淡路大震災の時に神戸に住む外国人の初期誘導で一番通じた言語が、中国語でも英語でもなく簡単な日本語であった、ということから始まった研究だそうです。その後、行政などにより、災害時だけでなく平時における外国人への情報提供手段として取り入れられ、さらに外国人と仲良くなるためのものとして注目され、「やさしい日本語ツーリズム研究会」が発足しました。2016年には「やさしい日本語ツーリズム」事業として福岡県柳川市と連携し、内閣府地方創生加速化交付金事業にも決定しています。

様々な場所で普及活動が広がるやさしい日本語ですが、吉開氏は「敬語を使わないことの難しさ」がやさしい日本語普及の壁になっていると言います。さらに日本語の全くできない人には、やさしい日本語であっても通じない、ということがあります。そこで吉開氏が着目するのが音声翻訳機との連携です。音声翻訳機では長い文章は正しく認識できないことも多く、認識されやすい話し方はやさしい日本語に通じる、と吉開氏は考えます。「やさしい日本語の考え方は、行政や観光分野だけでなく、今後は企業の雇用に関しても重要になるはず」と言い、「やさしい日本語と音声翻訳を組み合わせることで、コミュニケーションの可能性は全人類にまで広がるはず」と吉開氏は話しました。

藤田氏からはNICTによる多言語音声翻訳技術開発の取組やVoiceTraの利用状況などが説明され、「2020年にはショッピング、交通、医療、ホテルなどの分野で、多言語音声翻訳の技術が普通のICT機器として活用される」という利用目標が示されました。

最後に萩元氏から、小平市で行っている「東京2020大会に向けた外国人おもてなし事業」の様子が写真と共に説明され、「やさしい日本語は実用性があり、VoiceTraと組み合わせることで誰もができる多言語対応になります」という言葉で締めくくりました。

(平成30年作成)